ドクター井口のつぶやき その⑲

医者の不養生

井口昭久

夏の終わりは、毎年気分が沈む。寝起きが壮快ではない。階段を上るのに息切れがする。腕や脚の筋肉にビタミンが不足しているような、何ともいえぬ全身倦怠感がある。

そして夏の初めに受診した健康診断の結果が気になる。

私の大学では7月の初めに健康診断がある。専門の会社がバスに放射線装置を載せてやってくる。アルバイトの医師も看護師も連れて来る。

その日が近づくと私は酒を控えるようにしている。今年は、前日には酒を飲まなかった。当日、初めに身長を測定した。背筋を伸ばして測ったが、去年よりは5ミリ短くなった。加齢に伴い座高が短くなる。脊椎の椎間板が縮むことが原因である。足の長さは変わらないので、年を取ると相対的に足が長くなるのだが、見た目にはそうは見えないのが不思議である。

看護師が血圧を測った。160と100であった。大きく息をしてくださいと言われてもう一度測った。155と95であった。「お医者さんへ行ったほうがいいですね」と言われた。私はとっさに「イヤダ！」と言ってしまった。看護師は「そうですか」と言っただけで、それ以上相手にしてくれなかった。

医師の診察を受けた。

上半身裸になって若い医者の前に坐った。痩せた私の体に医師は聴診器をあてた。丁寧に、「それほどまでにしなくてもいいだろう」と思うほどに私の体をなめるように診察した。肋骨の骨と骨の間を触って叩いた。私は「どこかに悪い所があるのか？」と心配になった。若い医者は不安そうに言った、「聴診、打診に問題はないと思います」そして「僕は先生に学生の頃教わりました」と、言った。私が教えたように診察したようだった。

大学病院にいた頃、医者の健康診断の受診率が低かった。私は病院長として毎年保健所から強い叱責を受けた。看護師などの他の職種に比べて医者は健康診断を嫌がった。

医者の受診率の低いことは、全国の大学病院の共通の問題であった。

最近では文科省等の強い指導で、医者全員が受診するようになったと聞いている。

私が思うに、医者は忙しいので健康診断を受診しなかったのではない。医者は我が身に潜む病気を発見されるのが怖いのだ。病気が、いかに治りにくいものか、医者が、いかに頼りないか知っているのである。

病気になれば「お医者さんに身を任せれば安心」ではないことを知ってしまった職業の人種である。

私の今の大学では夏の終わりに健康診断の結果が通知される。

メールボックスに通知が入っていないと、ほっとする。

「今日は生き長らえた」とひとまず安心する。

ヒメハギ（牧草）

井口昭久　1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って―医者人生ソロソロ帰り道』（風媒社）など著書多数。